

海洋深層水に関する学びの推進に向けて

大塚耕司

(海洋深層水利用学会会長)

2015年の国連気候変動枠組条約締約国会議(COP21)でパリ協定が採択されて以降、世界各国は高い温室効果ガス(GHG)削減目標を次々と打ち出し、多くの国が2050年のカーボンニュートラル(GHG排出正味ゼロ)を宣言している。この目標を達成するためには、これまでの経済活動や生活様式を根本的に変える必要があることは言うまでもない。他方、2019年末から発生したコロナ禍もこれまでの経済活動や生活様式を一変させている。先進国でワクチン接種がある程度普及した今なお、感染者数の急激な増加はあちこちで見られ、国際的な人の移動は限定的なままである。人々は感染症に対して非常に敏感になり、日常の健康維持に高い関心を持つこととなった。

海洋深層水は、水・食糧・エネルギーすべてを生み出すことのできる再生可能資源である。上記のような脱炭素の世界的動きやコロナ禍の健康志向の向上は、大規模で安定した発電が可能な海洋温度差発電、海洋深層水を利用した健康増進施設や製品などを生み出すことのできる海洋深層水の資源価値を一層高めることとなる。しかし、残念ながら世間で広くその価値が認識されているとは言い難い。この一因として、化石資源に比べて圧倒的に資源密度が低い、すなわち経済的に不利であるということが挙げられる。しかし、コロナ禍を経て価値観が変化したことによって、経済的には不利だとしても持続可能な資源を選ぶべきだという考え方が、多くの人々の支持や共感を得る時代に移ってきているのではないだろうか。今こそ、持続可能な社会の構築に大いに貢献できる海洋深層水資源の価値について、広く内外に発信する好機であると考えられる。

本年5月半ば、東京インターナショナルスクール理事長で、国際バカロレア日本大使を務めておられ

る坪谷ニューエル郁子さんという方にお会いする機会を得た。その後オンライン講演会での基調講演を拝聴した際、坪谷さんが「子供が未来を作ります。その子供の才能を伸ばし育てるのが教育です。」と力強く語られた言葉が心に突き刺さった。例えば、現在SDGsがこれほど世の中に普及し、浸透してきている背景には、メディアでの情報発信もさることながら、初頭・中等教育においてSDGsに関する教育を展開していることがあると思う。もし小学校や中学校で海洋深層水について十分学ぶ機会が与えられていたら、重要な再生可能エネルギーの一つとして、誰もが太陽光や風力と同じように海洋温度差発電を挙げるに違いない。しかし残念ながら、大学の授業で海洋温度差発電を知っているか尋ねても、ほとんど手が上がらないのが実情である。

このような考えを巡らせたすえ、若年層を対象として海洋深層水について学ぶ機会を多く作ることが、海洋深層水の資源価値を広く普及させるための近道ではないかという結論に至り、本学会の中に、子供向けの学習コンテンツを収集・整理・開発し、実際に海洋深層水の学習イベントを行っていくためのチームを立ち上げることにした。幸い本学会には、北海道から沖縄まで全国各地の取水地に関係する会員が在籍しており、各取水地で保有する、さまざまな展示や、理科実験のような海洋深層水の学習コンテンツを比較的容易に収集できる環境が整っている。海外も含めてまずはそれらを収集・整理し、さらにそれらを核として新しいコンテンツを開発していけば、豊富なメニューのそろった学習コンテンツのデータセットを作ることができる。子供向けの海洋教育については、すでいくつかの海洋関連学会で組織的に行われているので、まずはそのような場を利用して学習イベントを実施し、いずれ本学会

主催の学習イベントを開催すればよい。実践経験が積み上がれば、ハンドブックや啓発冊子なども作成でき、初頭・中等教育に取り入れてもらえる可能性も出てくる。

本年5月に行われた本学会総会ののち、上記のような構想を会員各位に会員メールを通じて発信し、チームメンバーを募ったところ、10名の会員から参加するとの回答を得、本年10月、海洋深層水学習推進委員会を発足することとなった。キックオフの委員会において、活動の基本的な進め方について検討するとともに、国内外の学習コンテンツの収集作

業の役割分担を行った。今後は月1回のペースで委員会を開催し、まずは学習コンテンツの収集・整理の作業を進めることにしている。海洋深層水学習推進委員会の進捗状況については、随時理事会や総会、ニュースレター等で報告する予定であり、来年の全国大会には少しまとまった形で何らかの成果報告を行おうと考えている。会員各位には、本委員会の活動に対し、ぜひさまざまな形でご協力をお願いしたい。

以上